

「循環型社会」の実現を目指した、ペットボトル水平リサイクル・衣類リサイクルの啓発

2025 年活動報告書



名古屋市立大学伊藤ゼミ：NCU Global Justice Project

阿保孝典 大石貫太郎 大島太陽 加藤陽菜 栗山司 社本斉史

鳥居俊平 末吉恵悟 長尾悠平 中嶋秋 西垣優里 濱田理沙 米倉翔音

目次

はじめに	3
第1章 活動の背景 -プラスチックと古着の正義問題-	4
第1節 プラスチックをめぐる現状	4
第2節 衣類廃棄の現状	6
第2章 水平リサイクルについて	8
第1節 ペットボトルリサイクルの現状	8
第2節 水平リサイクルの取り組み	8
第3章 リユースとアップサイクル	9
第1節 衣類のリユースについて	9
第2節 学生服のリユースについて	10
第3節 衣類のリサイクルとアップサイクルについて	12
第4章 今年の活動内容	14
第1節 メーテレマルシェ	14
第2節 名古屋市立大学 市大祭	20
第3節 名古屋市立大学滝子キャンパス2号館内のペンギンリサイクルボックス増設	21
第4節 循環型社会の実現に向けたエシカル消費啓発活動	22
第5章 総括	25

はじめに

名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科伊藤恭彦ゼミ（以下、「伊藤ゼミ」）では、「NCU Global Justice Project」として、ペットボトルの水平リサイクルの啓発・実践活動を行ってきた。以前からの活動に加えて、本年度のゼミ活動では、新しい試みとして古着の再利用（リサイクル・リユース・アップサイクル）の実践・啓発活動を実施した。

以下の表は、本年度行った実践活動の概要をまとめたものである。

場所 (参加イベント)	実施日時	実施内容の概略
東別院 (参道マルシェ)	2025年6月28日 (土)	・リサイクルボックスの設置 ・意識調査アンケートの実施
本学滝子キャンパス (本学大学祭)	2025年11月8日 (土) 2025年11月9日 (日)	・古着アップサイクルワークショップ ・学生服の回収 ・古着の回収
オアシス21 (名古屋市消費生活フェア)	2025年11月15日(土)	・古着のアップサイクルワークショップ ・リサイクルボックスの設置
本学学内	昨年度から継続 (1号館) 2025年8月7日(木) (2号館)	・本学山の畑キャンパス1号館・2号館でのリサイクルボックスの設置・周知

表には書ききれなかったものの、東別院参道マルシェでは名古屋テレビ放送株式会社、本学大学祭及び名古屋市消費生活フェアでは中部リサイクル運動市民の会、株式会社大酬、学生服リサイクルShop さくらや名古屋店・恵那店及び運営会社である株式会社サングラッド、本学2号館でのリサイクルボックス設置にあたってはコカ・コーラボトラーズジャパン及び名古屋市立大学SDGsアンバサダーなど、多くの方々のご協力やご助言を頂き、恙無く今年度の活動を終えることができた。

この報告書では、プラスチックや古着に関する諸問題を整理し、それを踏まえて今年度の本ゼミがどのような活動を行ったかをまとめ、これからの展望として私たちなりに考えたことを記した。

第1章ではプラスチックや古着に関する諸問題を概観し、第2章でプラスチックの水平リサイクルについて、第3章で古着のリサイクル・リユース・リメイクについて、といった、正義に適う諸問題の解決方法を述べる。続く第4章では東別院参道マルシェ・本学の大学祭・本学内ペンギンリサイクルボックスの増設・名古屋市消費生活フェアで行った実践活動の具体的な内容に触れ、第5章で総括を行う。

第1章 活動の背景 -プラスチックと古着の正義問題-

第1節 プラスチックをめぐる現状

第1項 プラスチックと「海洋プラスチック問題」

日本プラスチック工業協会によると、プラスチックとは、「主に石油や植物由来原料により作られる合成樹脂に代表される高分子物質で、熱などを利用することにより形状を付与できる固形の物質」である、とされる^[1]。また、日精樹脂工業株式会社のウェブサイトでは、石油使用量全体に占めるプラスチックの割合は「わずか 7%」であり、「もしプラスチックがなく、すべてを他の素材で代用するとしたら、今まで以上にたくさんの資源が必要になり、はるかに大量の石油をムダ使いすることになります。」と述べている。

プラスチックは、その生産においては環境に与える影響は大きくないといえよう。

一方、プラスチックは「廃棄」の段階では地球環境に大きな負荷を与えている。その一例として、所謂「海洋プラスチック問題」が挙げられる。政府広報オンラインでは、「プラスチックごみは、微生物に分解されにくく、地球上に残り続け」、そのことによって、「生物や生態系、生活環境、観光、漁業等の様々な分野に悪影響を及ぼすことが懸念」されている、と説明されている。具体的には、「海に流出したプラスチックごみを海鳥や海の生物が誤食したり、漁業で使っていたプラスチック製の網やロープが海の生物に絡まったりといった生物への影響のほか、プラスチックごみが漁獲物に混入したり、スクリーンに絡まったりすることによる漁業活動などへの影響」がある。政府は、「こうしたプラスチックごみ問題は、我が国を含む世界全体の課題として対処する」ことが必要だ、と指摘している。

第2項 プラスチック問題と国際正義

日本を含む先進諸国では、プラスチックごみの処理手段として、利用済みプラスチックを発展途上国に輸出するという方法が取られてきた。

この方法には、先進国にとってはゴミ処理の手間が省け、発展途上国にとっては自国で製造することに比べ低コストでプラスチックを利用できる、という互恵的な側面もあることも事実である。しかし、相手国の処理能力を超えたプラスチックごみの輸出によって、汚染されたプラスチックが放置されるなど、深刻な環境問題を引き起こしている。さらに、放置されたプラスチックごみは河川に流入し、前述した「海洋プラスチック問題」をも引き起こしている。これらの原因としては、輸出前の分別の不徹底や過剰な輸出といった輸出する日本などの国々に起因するものも少なくない。なお、JICAによれば、「『低・中所得国』（途上国）と『高所得国』（先進国）では、プラスチックごみの総排出量はほぼ同程度である」にもかかわらず、「海洋へ流出するプラスチックごみの約96%は『低・中所得国』（途上国）から排出」されている。JICAは、「途上国から多くのプラスチックが海洋へ流出する主な要因は、先進国との廃棄物管理能力の違い」であるとしている。しかし、途上国がプラスチックごみを輸入していることも無視できないと筆者は考える。環境悪化が途上国の廃棄物管理能力の低さによるものであったとしても、その廃棄物管理能力の不十分さを無視し、自国の利益のために輸出した国々によって、アフリカなどの国々では住環境の悪化や病気の発生リスクの上昇などが発生している。先進国によるプラスチックごみの海外輸出は、自然環境のみならず輸入国の人々にも危害を与える行為であり、正義に反すると評価せざるをえない。先進国はこの不正義に対して道義的責任を負っており、是正のための努力をすべきであると言えよう。

第3項 改善に向けた動き

この問題を踏まえ、世界的にプラスチックごみの輸出を規制するためのさまざまな施策が取られるようになった。たとえば、有害廃棄物越境移動の国際的なルールとしてバーゼル条約[2]が1989年に採択され、1992年に発効した。また、2017年に中華人民共和国、2018年にタイ・ベトナム・マレーシア、2019年にはインドが廃プラスチックの輸入を禁止し、2021年にはバーゼル条約の改正によって、廃プラスチックを輸出する際には事前に輸入国の同意を得ることが必要となった。

また、素材の改良や消費行動の変革によって、プラごみの削減を目指す動きもある。先ほども取り上げた日精樹脂工業株式会社のウェブサイトでは、「微生物によって分解され土に戻る性質を持つ生分解性プラスチックや、植物由来のプラスチック」が開発されていることが紹介され、さらに、「使用済みのプラスチックを焼却処理し、その熱エネルギーを暖房や温水などに有効に利用したり、再び溶かして、クイやベンチなどの材料として再利用したりする」といった、効率的な再利用が行われていることも紹介されている。我々消費者にとって身近な例を見てみると、自治体によるプラスチックゴミ（の一部）の資源回収がある。名古屋市は、プラスチック製品やプラスチック製の包装容器などのプラスチックごみの一部を、資源として回収する取り組みを2024年4月から始めている。他方で、豊田市では、包

装容器は資源としてリサイクルを行うものの、プラスチック製品は可燃ごみとして取り扱うなど、県内の自治体でも対応が異なっており、住んでいる市によって再利用への意識や取り組みに差が出てしまうという懸念がある。また、第2章で詳述するが、ペットボトルの水平リサイクルなど、私たち一人ひとりが比較的容易に取り組むことのできる方法も少なからず存在する。

マイクロプラスチックは、海洋生物にとってだけでなく、人にとっても重大な問題である。2022年のオランダの調査では、健康な成人22人のうち17人の血液からマイクロプラスチックが検出された。マイクロプラスチックは生殖、消化、呼吸器系の健康に害を及ぼす疑いがあり、大腸がんや肺がんとの関連も示唆されている。プラスチックごみの削減は、人類の未来を守ることにもつながると言えるのである。

第2節 衣類廃棄の現状

第1項 国内における衣類廃棄

2020年から2023年の環境省の調査報告によれば、国内の衣類新規供給量は年間79.8万トン（約35億着）に達する一方で、家庭や事業所から手放される衣類の総量は約73.7万トンと推計されている。このうち、リユースされる割合は約19%、リサイクルされる割合は約15%にとどまり、残りの約65%にあたる約48.5万トンは、そのまま廃棄・焼却処分されている。

ここでの課題は廃棄衣類の多くが可燃ごみとして処理され資源循環が断たれている点である。焼却は熱エネルギーとして回収できる側面はあるものの、素材をそのまま再使用・再生利用するよりも環境負荷が大きく環境負荷低減の観点からすると不十分であるといえる。

第2項 国外の現状

国外においては、先進国から排出された古着が途上国へ大量に輸出され、現地の環境を脅かす、環境正義の問題が顕在化している。

日本を含む先進国からリユース品として輸出された衣類は、チリやガーナといった国々に集積している。チリ北部にはヨーロッパ、アメリカ、アジアから毎年6万トン以上の服が出荷されており、衣類の多くはアタカマ砂漠にて廃棄されたり、焼却されたりしている。不法投棄され、衣類の山といえるほど集まった廃棄衣類は衛星写真から確認できるほどであり、チリの景観と環境を破壊している。また、ガーナのカンタマント市で市場には毎週約1500万着が流入している。しかし、品質低下の理由からその約4割はごみとなり、埋め立て地や海流を汚染している。これらの問題から必ずしも服を送ることが発展途上国に良い

影響をもたらすとは限らない。このように衣類の再使用について輸出国側の責任が問われているのが現状である。

こうした状況を受け、欧州では政策による取り組みが進んでいる。フランスは2020年に循環経済法（Loi AGEC）を施行し、世界で初めて衣類を含む売れ残り品の焼却・埋め立てを禁止した。EU全体でも「持続可能な繊維製品戦略」を掲げ、生産者責任（EPR）の強化や、デジタルプロダクトパスポート（DPP）により製品の製造から廃棄・リサイクルにいたるまでのトレーサビリティの確保を推進しており、大量廃棄問題の解決を図っている。

第3項 本学「自分とみんなで考える哲学」受講生アンケート分析

本項では本学の一般教養科目「自分とみんなで考える哲学」と基幹科目「政治学」の受講生178名を対象に実施された衣類に関する意識調査の結果を分析する。

まず衣類の購入価格に関して、夏服では「3000円未満」が53%と過半数を占め、「5000円未満」まで含めると87%に達する。一方、単価の上がる冬服においても「5000円未満」の購入層は62%を占めており、高額な衣類を選ぶことは限定的となっている。このように学生が購入する衣類の価格帯は、ファストファッションへの依存の高さを示している。

次に衣類の廃棄行動に至るプロセスと心理的要因に関して、処分方法は、「ごみとして捨てる」が35%で最多となっており、22%の「資源回収」、18%の「売る」という処分方法をかなり上回っている。ごみとして捨てる理由として、86%が「手軽に処分できるから」と回答した。これは先行研究（田中，2015）でも指摘されているように、リサイクル行動における「手間（分別・持ち込みの労力）」が最大の阻害要因であることを裏付けている。衣類を手放す動機では「破れや汚れ（51%）」という物理的な要因とほぼ同率で「流行や好みの変化（48%）」「飽きた（31%）」といった心理的要因が挙げられている（複数回答）。これらは安価で手に入れたファストファッションの衣類は流行や心理の変化により物理的には使用可能であっても簡単に手放す対象となっている可能性があることを示している。

一方で学内における衣類回収ボックスについては、78%が「利用したい」と回答している。現状では手軽さを重視することでごみとしての廃棄を選択している層も、リサイクル行動に対する意欲がある人は多く、生活圏内であるキャンパスに回収するシステムが整備されることでリサイクルを行う可能性があることが示唆された。

以上の学生アンケートの分析から利便性の高い回収設備の構築が行動変容につながる事が考えられる。日本の焼却依存や先進国から途上国への廃棄物転嫁の問題にはフランスの法規制のような対策に加え、大学キャンパスのような身近なコミュニティにおける簡単に衣類を回収できるインフラの整備が必要だと思われる。

[1] 引用文献の作成者によれば、プラスチックを定義することは難しく、作成者は今回の定義を「100点満点ではないものの、合格点は取れる言い方ではないか」と評価している。

^[2] 正式名称は「有害廃棄物の国境を越える移動及びその処分の規制に関するバーゼル条約」。UNEP（国連環境計画）が中心となり制定された。

第2章 水平リサイクルについて

第1節 ペットボトルリサイクルの現状

第1章ではプラスチック問題、特に海洋汚染につながるマイクロプラスチックの問題を取り上げ、適切な資源循環などによりプラスチックごみの削減をすることが海洋生物や人類の未来を守ることに繋がると述べた。本章では、私たち一人ひとりが身近なところからできるプラスチックごみの削減に繋がる行動としてペットボトルのリサイクルについて扱う。

PET ボトルリサイクル推進協議会によると 2024 年度のペットボトルのリサイクル率は 85.1%となっており、目標の 85%を上回っている。一方で推移としては過去 10 年間、84%～88%台で横ばいになっており、またリサイクルの中でも食品トレーやフィルムシート、衣類など様々な用途に分かれており、これらのいわゆるカスケードリサイクルには、ペットボトルの再資源化こそできるものの、その先で最終的に廃棄されることも多々あることから、完全な資源循環とは言えないという現状がある。

第2節 水平リサイクルの取り組み

第1項 水平リサイクルとは

カスケードリサイクルの課題を解決する取り組みとして「水平リサイクル」がある。これはペットボトルの場合「ボトル to ボトル」とも呼ばれ、使用済みペットボトルを再びペットボトルとして、などのように元の製品と同様の品質を保って再び活用できるようにするリサイクルの手法であり、カスケードリサイクルと異なり、何度でも再資源化ができるという点に大きな強みを持つ。

「ボトル to ボトル」の場合、「マテリアルリサイクル(メカニカルリサイクル)」や「ケミカルリサイクル」、「FtoP ダイレクトリサイクル」など複数の手法が活用されている。

マテリアルリサイクル(メカニカルリサイクル)は、回収された使用済みペットボトルを選別、粉碎、洗浄して表面の汚れ、異物を十分に取り除いた後に高温下に曝して、樹脂内部に留まっている汚染物質を拡散させ除染を行うリサイクルの手法を指す。後述のケミカルリサイクルと比べると大掛かりな分解設備や重合設備を使わないため、製造コストや環境負荷が低くなるという利点がある。

ケミカルリサイクルでは、回収された使用済み PET ボトルを選別、粉碎、洗浄して異物を取り除いた後に、解重合を行うことにより PET 樹脂の原料または中間原料まで分解、精

製したものを重合して新たなPET樹脂とするリサイクル手法である。ケミカルリサイクルの特徴は解重合/再重合の間に異物、異種材質が取り除かれ、より品質の高いPET樹脂に再生できるという点にある。

さらに2017年に開発されたFtoPダイレクトリサイクルでは、回収したペットボトルを粉砕・洗浄した「フレーク(Flake)」を高温で溶解・ろ過後、直接プリフォーム(中間成形品)の製造を行い、マテリアルリサイクル(メカニカルリサイクル)以上に低い環境負荷でペットボトルの水平リサイクルを実現できるとして国内でも活用されている。

第2項 水平リサイクルの展望

水平リサイクルでは、新たな原料を使って製品を製造するよりも、製造時に発生するCO₂を削減でき、特にボトル to ボトルの一手法であるFtoPダイレクトリサイクルでは約70%のCO₂削減効果が期待されている。また第1項で述べたように、別のものに再資源化するカスケードリサイクルと比べ、水平リサイクルには何度でも再資源化ができるという大きな利点があり、循環型社会の実現に向けて必要不可欠な仕組みである。

一方で水平リサイクルにおいては再資源化の段階でその品質保証が重要であり、ボトル to ボトルの場合、衛生面などの問題をクリアするため、異物の混入は絶対に避けなければならない。また、衛生面に問題がなくとも、異物の混入は品質の劣化を招き、何度でも再資源化ができる水平リサイクルの利点が損なわれてしまう。そのため、ボトル to ボトルをはじめとする水平リサイクルの推進にあたっては消費者一人ひとりによる資源の分別が重要な役割を果たす。私たち伊藤ゼミでは、ボトル to ボトルの推進のため、学内外でボトル、ラベル、キャップを分けて回収することのできるリサイクルボックスの設置を提案し、運用している。このリサイクルボックスの詳細については第4章で後述する。

第3章 リユースとアップサイクル

第1節 衣類のリユースについて

第1項 リユースの現状

リユースとは、1度使用した製品を、形を変えずにそのまま使うことである。これを衣類に当てはめると衣類のリユースとは着なくなった衣類を捨てずにそのままの状態でも繰り返し再利用することである。第1章で述べたとおり衣類がリユースされる割合は非常に低く年々増加しているがまだ改善の余地があるとされる。その中で環境省は、「衣類の資源循環システム構築に向けた現状」によると2025年度中に「リユース等の促進に関するロードマ

ップ」を策定予定としており、リユース促進に向けた基盤づくりを行い将来的にはリユースが当たり前になる状態を目指している（環境省 2025：10）。

第2項 衣類回収について

衣類のリユースは、親戚や友人間での譲渡やアプリ上での売買など様々な方法がある。その中でもここでは誰でも個人で行うことができる衣類回収について述べる。

環境省の「衣類の回収に関する現状」によると現在、自治体や事業者等による衣類回収の類型は3つに分けられている。

1つ目は行政回収である。行政回収は、自治体が主体となり実施される。具体的な回収方法としては、住民が決められた場所に衣類を持ち込むステーション回収や住民が自宅前に排出した衣類を回収する戸別回収などがある。

2つ目は集団回収である。集団回収は、子供会やPTAなどの地域コミュニティが主体となり実施される。具体的な回収方法は行政回収同様、定期的にステーション回収や戸別回収などがある。

3つ目は店頭回収である。店頭回収は、アパレル企業やリユースを目的とする事業者が主体となり実施される。回収方法は店頭ボックスを設置することや手渡しでの衣類の回収がある。店頭回収は衣類を持ち込んだ際に回収を実施している企業やブランドで利用可能なクーポンやポイントを付与する場合もある（環境省 2025：11）。

第3項 衣類回収の課題

第2項から様々な形態で衣類回収が行われており、それぞれの利用のしやすさで選択することができることが分かる。しかし、これらの衣類回収では必ずしも全ての衣類を回収できるわけではない。

例えば、環境省によると行政回収ではあくまで再利用可能なものを前提とし、汚れている・濡れているもの等は対象外となることが多い。また、店頭回収では、衣類の品目・状態による制限のほか、ある特定の企業やブランドの衣類のみが対象となっている場合もある（環境省 2025：11）。そのためリユースすることができず捨てるという選択になってしまう衣類も存在すると考えられる。そこで本ゼミでは、第2項で述べた衣類回収では回収することができない衣類を回収し、リユースすることを考えた。そして、次の節ではその中で着目した学生服のリユースについて提案する。

第2節 学生服のリユースについて

第1項 学生服の回収

この節では第 1 節の第 3 項で述べたとおり、学制服のリユースについて提案する。学制服は校章や名前として刺繍が入っている等の理由から衣類回収の対象外であることが多い。実際に大型ショッピングセンター等に設置されている PASSTO という回収ボックスは学制服や体操服はリユースすることが難しいため対象外となっている。また、ゼミ内では、学制服は一般的な衣類とは異なり学生時代の思い出が詰まっている特別なものと考えられるにもかかわらず、卒業してから着用する機会もなく、クローゼットに眠っているという声があった。さらに、大学生は高校を卒業してからの期間が浅く学生服が残っている可能性が高いということから学生服を回収することは需要があるのではないかと考えた。

第 2 項 学生服の需要

学生服をリユースすることは学生服が廃棄されることを防ぐだけではない。名古屋市の「ひとり親世帯等実態調査結果」によるとひとり親世帯の内父子世帯が約 2500 世帯であるのに対して母子世帯は、約 25000 世帯と約 10 倍で圧倒的に多い。しかし、父子世帯の平均年収は約 650 万円であるのに対して母子世帯は約 320 万円と半分の年収である。そして、日本経済新聞によると学生服の価格は 10 年間で 3 割上昇し、男女ともに上下セットで 3 万 5 千円以上が一般的となった。そのため子どもの学生服を通常の価格で購入することは決して安い買い物ではないことが分かる。特に平均年収が低い母子世帯にとっては大きな負担になっていると考えられる。そのため学生服のリユースは、第 1 項で述べた学生服が捨てられるのを防ぐことに加えて貧困など様々な理由で学生服を安く購入したい家庭の助けとなるのである。

第 3 項 学生服リユースショップさくらや

さくらやは、2010 年に開業された学生服リユースショップである。ただ単に学生服を売って買うリユースショップではなく、学生服のリユースを通じて環境・社会・経済の各側面から持続可能な地域社会を実現することを目指している。全国に 80 店舗 80 通りのお店づくりに挑戦しており、多くの人に着なくなった学生服を再活用して販売することができている。名古屋店の店主である塚本さんは、自らが子どもの幼稚園のバザーに参加した際に朝早くから並んでいる保護者の方を見て「気軽に学生服を購入する場があれば」と思いお店を始められた。塚本さんによると学生服の需要は様々で入学前だけでなく、衣替えの時期や修学旅行前などでも学生服を購入しにお店を利用する人がいる。また、破れなどによって買い取ることができない学生服もあるが、汚れやほつれがあったとしても捨てられることがないようできるだけ引き取っているそうだ。

本ゼミでは、さくらや名古屋店、恵那店と協力し、大学内で回収した学生服をさくらやに持ち込むことによって着なくなった学生服を次の人にバトンとして繋いでいくことに努めた。

第3節 衣類のリサイクルとアップサイクルについて

第1項 リサイクルの現状・課題

リサイクルとは、廃棄物などを一度資源に戻し、新しい製品の原料として再利用することである。これを衣類に当てはめると、不要になった衣類を回収し、繊維や化学原料として再生したり、あるいは断熱材やウエスなどの別製品に作り変えたりすることを指す。

リサイクルの先進的な事例として、伊藤忠商事が展開する「RENU（レニュー）」プロジェクトが挙げられる。このプロジェクトは、廃棄された衣類や工場での裁断くずを原料とし、「繊維から繊維へ」の循環（サーキュラーエコノミー）を実現することを目指している。これは従来のバージンポリエステルを使用した場合と比較して、CO2 排出量を約 58.8%、水の使用量を約 47.3%削減できるという高い環境効果を実証されている。さらに最新の動向として、2026 年春夏シーズンからは人気ブランド「SNIDEL」等の製造工程で出る裁断くずを回収し、再び裏地として活用するブランド内循環モデルの構築も進められている。

様々な事業者が衣類のリサイクル推進に努めているが、環境省のデータによれば、日本国内における衣類のリサイクル率は約 8%程度に留まっており、30%を超えているリユースと比較しても低い水準にある。リサイクルが進まない主な要因としては、衣類が多様な素材（綿、ポリエステル、ポリウレタンなど）の混紡で構成されていることが挙げられ、素材ごとの分別や再生に多大なコストと技術を要する点が大きな課題となっている。そのため、環境負荷低減を目的としたリサイクルが、加工プロセスにおいて新たなエネルギー資源を消費してしまうという矛盾を抱えている。そこで本ゼミでは、前述で述べた衣類のリサイクルに代わり、より持続可能な再利用方法として注目されている「アップサイクル」に着目した。次の項では、アップサイクルについて詳細に述べていく。

第2項 衣類のアップサイクルについて

この項では、第3節の第1項で述べた通り、リサイクルの課題をカバーしたアップサイクルについて提案する。アップサイクルとは、本来捨てられるはずの製品に、デザインやアイデアという新たな付加価値を持たせることで、別の新しい製品にアップグレードして生まれ変わらせることである。リサイクルが「素材に戻す」のに対し、アップサイクルは「素材の形や特徴を活かしたまま再利用する」ため、加工に必要な水やエネルギーの消費を最小限に抑えることができる。また、単なる「リメイク」が製品価値の向上を必ずしも問わない

のに対し、アップサイクルは「元の製品より高い価値を生み出すこと」を目的としており、新たな商品カテゴリーとして市場へ投入できる可能性を秘めている。

さらに、このアップサイクルの考え方は、SDGsとも深い関連性がある。特に目標12「つくる責任 つかう責任」との親和性が高く、廃棄予定の資源に新たな価値を与えて循環させるアップサイクルは、持続可能な生産と消費のパターンを確保するための具体的な解決策の一つといえる。環境省の提唱するサステナブルファッションの推進においても、製品の寿命を延ばし、廃棄量を最小限に抑えるアップサイクルは、サーキュラーエコノミー（循環型経済）の実現に寄与する重要な役割を担っている。

第3項 名古屋市のアップサイクル施策

名古屋市では、市民の意識を「捨てる」から「活かす」へと転換させるため、アップサイクルの認知度向上に向けた取り組みを強化している。具体的には、「アップサイクルなごや」のロゴマークを作成・使用することで、よりアップサイクルを身近に感じ、親しんでいただけるような啓発活動を行っている。

次に名古屋市で実際に行われているアップサイクルの取り組みをいくつか紹介する。まず「トナリの学校」である。トナリの学校とは、「アップサイクルを通して、環境問題について楽しみながら学び、考える場づくりをする」を理念に、持続可能な社会に向けて名古屋市内の民間企業と学生が取り組む教育プロジェクトである。令和5年度にトナリの学校が星ヶ丘テラスで実施したイベントでは、コロナ禍で使用した「アクリル板パーテーション」から「お守り」をつくるといった体験型ワークショップを行い、のべ167名の市民が参加した。また、名古屋市はSNSを活用した「#アップサイクル名古屋」キャンペーンを実施するなど、若年層を含む幅広い層への浸透を図っている。今後、市はさらにこの動きを加速させ、貴重な資源を循環させる「持続可能な循環型都市」の実現に向けた意識醸成の柱として、アップサイクルを位置づけている。このように名古屋市では積極的にアップサイクルの推進活動を行っていることを踏まえて、本ゼミでも中部リサイクル運動市民の会のご協力のもとアップサイクルの推進活動を行った。

第4項 認定NPO法人 中部リサイクル運動市民の会

名古屋市を拠点に活動する「中部リサイクル運動市民の会」は、1980年代から資源循環を推進してきた先駆的な団体である。同会では、単に資源を回収するだけでなく、リユースやリサイクル、さらにはアップサイクルの連鎖を生み出す多角的な活動を展開している。近年では「循環フェス@名古屋」を主催し、Z世代の学生ボランティアと共にファッションショーやワークショップを開催するなど、クリエイティブな視点から「ごみを出さない暮らし」の楽しさを提案している。同会の活動は、第1節で述べた「リユース」が難しい衣類であっ

ても、地域コミュニティのアイデアによって新たな価値を持つ製品へと再生できることを実証している。

次に、同会が名古屋市内での普及・運営を担っている画期的な取り組みの一つである、衣類循環プラットフォーム「RELEASE⇔CATCH（リリースキャッチ）」について述べる。これは「服の手放し方に、新しい選択肢を」というコンセプトのもと、従来の「捨てる」という感覚ではなく、次に必要とする人や資源へと「手放す（RELEASE）」ことで、新たな価値として「受け取る（CATCH）」循環を目指すプロジェクトである。この「RELEASE⇔CATCH」は、環境省の「令和6年度補正予算 使用済衣類回収のシステム構築に関するモデル実証事業」に採択され、名古屋市も連携団体の1つとなっている。この仕組みでは、名古屋市内の商業施設や公共施設に専用の回収ボックスを設置し、単なる廃棄物回収ではなく、コミュニティ全体で資源を循環させるプラットフォームとしての役割を担っている。

本ゼミでは、中部リサイクル運動市民の会と協力し、同会が回収したTシャツやハンカチ、ハギレ等を寄付していただいた。そして本学の大学祭である「市大祭」および名古屋市主催の「消費生活フェア」において、これらを素材としたアップサイクルワークショップを開催した。また「RELEASE⇔CATCH」を一週間設置し、学内での古着回収に努めた。

第4章 今年の活動内容

第1節 メーテレマルシェ

第1項 活動の目的

本活動は、名古屋市内における水平リサイクルのさらなる周知・啓発を主目的としている。アンケート調査においては、特に以下の2点の把握に重点を置いた。

- ①来場者の水平リサイクルに対する認知度の測定
- ②外出時におけるペットボトル分別の実践状況（キャップ・ラベルの分離）の調査

第2項 活動の内容

2025年6月28日に開催されたメーテレマルシェにて、使用済みペットボトルを同じペットボトルへと再生する水平リサイクルの啓発活動を実施した。

- ①分別体験：本ゼミ独自制作のペンギンリサイクルボックスを設置。来場者にキャップ・ボトル・ラベルの3分別を実際に体験していただいた。
- ②啓発品の配布：水平リサイクル啓発用クリアファイルに加え、名古屋市環境局提供の市内回収の小型家電由来再生プラスチック製ボールペンを景品として配布した。

③調査活動： ペットボトル水平リサイクルおよび古着に関するアンケート調査を実施した。

以下の写真は活動の様子である。



第3項 アンケート調査

アンケートは専用ブースにて、呼びかけに応じた来場者 200 名を対象に実施した（選択肢形式および一部筆記）。調査項目には水平リサイクルに加え、循環型社会への関心を問うため古着の活用方法についても盛り込んだ。以下は実際に行ったアンケートの内容である。

循環型社会・ペットボトル水平リサイクル・古着アンケート

はじめに、あなたの年代を教えてください。（ 代）※10代未満の方は0と記入
以下、当てはまる番号に○をつけてください。

① ペットボトル水平リサイクル（使用済みのペットボトルを原料に、同じ種類のペットボトルを再現するリサイクル方法）を知っていますか。

1. 聞いたことがあり、内容も知っている
2. 聞いたことはあるが、内容は知らない
3. 聞いたことはない

※1 を選択された方に質問です。

①-1 ペットボトル水平リサイクルのメリットを知っていますか。

1. はい
2. いいえ

※1を選択された方に質問です。

①-2 知っているメリットの詳細を教えてください。(複数回答可)

1. 石油資源の節約(原材料の海外依存の減少)
2. 環境負担の低減(廃棄物の減少、CO2削減)
3. リサイクル前後での品質の維持
4. その他()

②今後、なんらかの形で水平リサイクルに取り組もうと思いましたか。

1. 積極的に取り組みたい
2. 機会があれば取り組みたい
3. 取り組みたいが機会がない
4. 思わない

③普段からペットボトルを分別していますか？

1. ボトルとキャップを分別している
2. ボトルとラベルを分別している
3. すべて分別している
4. していない

④自治体の分別回収に協力していますか？

1. している
2. 一部している
3. していない

※1、2を選択された方に質問です

④-1 どのような思いで分別に取り組んでいますか？(複数回答可)

1. 社会的な責任・義務である
2. 環境を良くしたい
3. 将来世代のために今できることをしたい
4. 特に考えていないが習慣になっている
5. その他()

⑤もう着なくなった服はどうしていますか？

1. 捨てる
2. しまう
3. 売る
4. 譲渡する
5. 古着の回収に出す
6. アップサイクルする(廃棄物や不用品にデザインなどの価値をつけて、新しく生まれ変わらせること。例：リメイク)
7. その他()

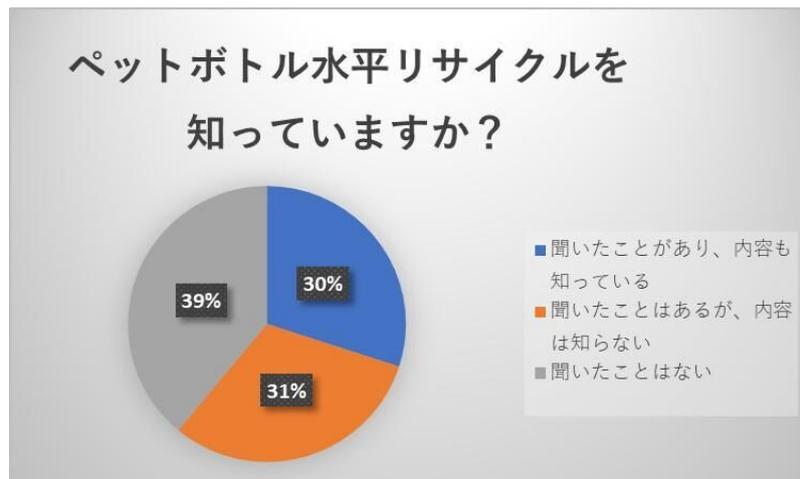
アンケートは以上です。ご協力いただきありがとうございました。

第4項 結果と分析

「ペットボトル水平リサイクルを知っていますか」という設問に対する回答は以下のグラフに示された通りである。「聞いたことはあるが内容は知らない」(39%)または「聞いたことがない」(31%)との回答が多数を占めた。一方、循環型社会を目指すうえで理想的とされる「聞いたことがあり、内容も知っている」(30%)と回答した人は最も少ない割合であった。社会全体でリサイクル意識が高まっている一方、約4割の回答者が「水平リサイクル」という言葉自体に触れたことがない現状が示されている。

内容まで知っている層が30%と最も少ないことから、水平リサイクルが一部の関心が高い層に限定された知識となっている可能性が示唆される。また、一般消費者にとっては、「リサイクル」と「水平リサイクル」の違いがまだ明確に認識されていないことが推察できる。

この結果から、名古屋市内における水平リサイクルの周知は未だ途上であり、本活動の目的である啓発の必要性を再確認できたとともに、実施の意義は十分に果たせたといえる。

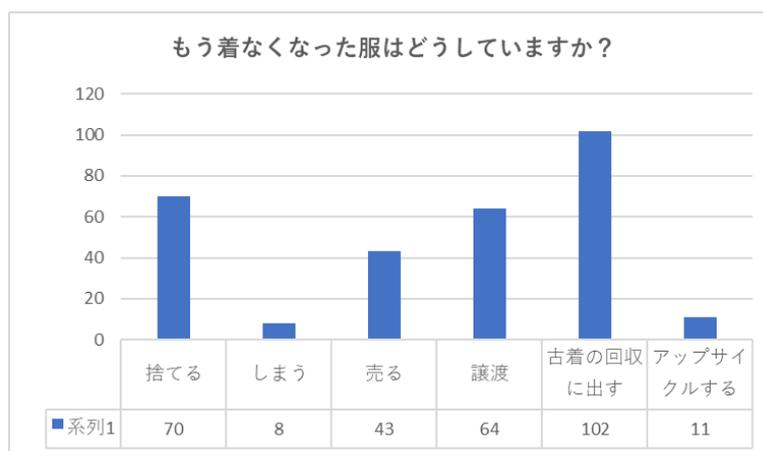


また、「もう着なくなった服はどうしていますか？」という古着への意識を問う設問（複数回答可）への回答は以下のグラフの通りである。最も多い回答は「古着の回収に出す」（51%）であった。過半数の人が自治体やアパレル店舗の回収ボックスを利用しており、衣類を資源として捉える意識が一般化していることが伺える。

「捨てる」（35%）は依然として多いものの、「譲渡」（32%）や「売る」（21%）といったリユースを選択する層の合計がそれを大きく上回っている。フリマアプリの普及や、知人間での譲り合いが、廃棄のハードルを上げている可能性がある。

「アップサイクル」（6%）は、技術や手間が必要なためか、まだ一部の層に留まっている。また、「しまう」（4%）という回答が極端に少ないことから、現代の消費者は着ないものは手元に残さず、何らかの形で手放すという循環型のライフスタイルを好む傾向があると言える。

特に「古着の回収」が「捨てる」を大きく上回っている点は、SDGs への関心の高まりや、企業の回収スキームが整備された結果であると考察できる。まだ少数派である「アップサイクル」の普及や、回収された後の衣類がどのように再資源化されているかという「透明性」への関心が、今後の消費者行動の変化に繋がっていくと予想される。



本調査を通して、現代の消費者は「資源を回収に出す（手放す）」という入り口の行動には非常に積極的であるものの、「それがどう循環するか（再生の質）」という出口の仕組みへの関心はまだ低いという実態が浮き彫りになった。このことから、衣類のように再利用されるイメージが明確なものは循環が進みやすいため、ペットボトルにおいても水平リサイクルの意義をより視覚的に、かつメリットとして伝える啓発が必要だと考える。回収に出すという現在の習慣を維持しつつ、その一歩先にある「資源の価値を損なわない循環（水平リサイクル）」の仕組みを理解してもらうことが、ラベル剥がしの徹底といったより質の高い分別を促す鍵となると感じた。

第5項 活動の総括

本活動を通じて、多くの来場者に水平リサイクルへの関心を持ってもらうことができた。ゼミ内での活動に留まらず、名古屋市環境局という外部機関との連携、および「ペンギンリサイクルボックス」という視覚的な工夫を取り入れたことは、啓発活動をより実効性の高いものにした。

アンケート結果からは、現代の消費者の分別の習慣化やリサイクルへの積極性が確認された一方で、水平リサイクルという概念そのものの認知不足や、リサイクル後の「循環の質（出口の仕組み）」に対する理解の浅さが浮き彫りとなった。特に、ペットボトルのラベル剥がしの徹底が、単なるゴミの減量ではなく、再生プラスチックの品質を維持し水平リサイクルを成立させるために不可欠なステップであるという認識を広めることの重要性が再確認できた。

また、古着に関する調査結果では、「捨てる」よりも「回収に出す」「譲渡する」といった資源循環を好む傾向が見られた。これは衣類において「資源として再利用されるイメージ」が定着している証左であり、ペットボトルにおいても同様のイメージを消費者に植え付けることが、今後の行動変容の鍵になると推察される。

調査結果を基に、より効果的な周知方法を今後も検討していきたい。

第2節 名古屋市立大学 市大祭

第1項 活動の目的

本イベントでは学生や周辺地域の住民をターゲットに、古着リユース・アップサイクルおよび循環型社会の啓発を目的に活動した。親子連れの多く訪れるイベントに出展することで、子どもをきっかけにした意識改革やより効果的な学制服のリユースの周知を期待した。

第2項 活動の詳細

2025年11月8日、9日に開催された名古屋市立大学市大祭において、伊藤ゼミとして学生服・古着回収、回収した古着を活用したアップサイクルワークショップを出展した。

教室内に学生服・古着回収コーナーを設置し、来場者が持参した不要な学生服・古着を回収した。学生服は学生服リユースショップさくらやに売却し、その収益をUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)に寄付した。古着のうちTシャツはアップサイクルワークショップの材料として再利用し、その他のものは中部リサイクル運動市民の会にリユース品、リサイクル資源として回収していただいた。

古着アップサイクルワークショップでは、材料を中部リサイクル市民の会やゼミ生から集めて実施した。Tシャツを再利用したエコバッグ作りに加え、古着の端切れを使った缶バッジやコースター作りを行った。リメイクの内容に関しては、株式会社大翻に何度か相談し、貰ったアドバイスを元にゼミ内で決定した。来場者が自らの手で不要になった衣類に新たな価値を加える体験を提供し、楽しみながらアップサイクルに触れてもらう工夫を凝らした。以下が市大祭の様子である。



第3項 活動の結果

回収した学生服は11校に及び、古着は41.2kg回収することができた。学生服はさくらや名古屋店、さくらや恵那店に持ち込んで5000円で買い取っていただいたので、同額を銀行振り込みにてUNHCRに寄付した。

古着アップサイクルワークショップには2日間で200人を超える方々に参加していただき、ブースは終始大きな賑わいを見せた。参加した子どもたちや保護者からは、身近な古着が実用的なアイテムに変わる過程に驚きや喜びの声が上がり、非常に充実した啓発活動となった。この活動を通して、循環型社会の仕組みを多角的に周知することができた。

第3節 名古屋市立大学滝子キャンパス2号館内のペンギンリサイクルボックス増設

第1項 増設の目的

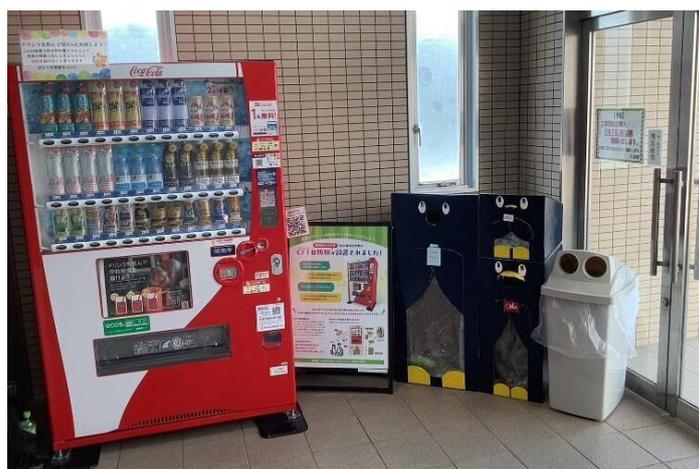
Cup For Two (=CFT) 自販機とは、売り上げの一部がアフリカ・アジアの子供達に学校給食の提供を目的とした寄付が行われるものであり、本学におけるCFT自販機は、名市大SDGsアンバサダーの働きかけにより設置されたものである。

今回の設置は、ペンギンリサイクルボックスが新たに置かれることにより、そのままではゴミとして捨てられてしまうペットボトルの再資源化を促進することに加え、このCFT自販機の存在をアピールし、本ゼミやSDGsアンバサダーの活動理念を広く伝えるという効果をも期待して実施されたものである。

SDGsアンバサダーは名市大で学ぶ学生で構成されたメンバーで、名古屋市立高針台中学校での出張授業など、対外活動も実施されている。本ゼミの、CFT自販機の横にペンギンリサイクルボックスを設置したいという依頼にご快諾いただいたことで、今回設置するに至った。

第2項 活動の詳細

既に設置済である滝子キャンパス1号館1階の自販機横に加え、2号館1階のCFT自販機の横にも同型ペンギンリサイクルボックスの設置を行った。コカ・コーラボトラーズジャパンにも回収作業をご了承いただき、設置の際には担当者にも立ち会っていただいた。以下が設置したリサイクルボックスの外観である。



第4節 循環型社会の実現に向けたエシカル消費啓発活動

第1項 活動の目的

現代社会において、大量生産・大量消費・大量廃棄を基盤とする経済からの脱却は喫緊の課題である。持続可能な開発目標（SDGs）の目標12「つくる責任 つかう責任」に示される通り、資源の効率的な利用と廃棄物の抑制は、地球環境の持続可能性を担保するための重要な要素である。このような背景から、消費者が日々の選択を通じて社会課題の解決に寄与する「エシカル消費」の普及が強く求められている。水平リサイクルを成立させるためには、供給側の努力のみならず、需要側である消費者の高い分別の意識と、エシカルな購買行動が不可欠である。本活動は、地域社会における循環型経済の提案を目的として参加した。以下、令和7年11月15日に実施された、水平リサイクルおよび循環型社会の啓発を目的としたイベントの実施内容とその意義について詳述する。

第2項 活動の詳細

本イベントは、都市部における情報発信の拠点である「オアシス21 銀河の広場」を会場とし、実施された。消費者団体、事業者団体、学校（教育機関）、および行政機関が一体となって各ブースを設置し、盛り上げた。

イベント内では、消費生活に関する以下の主要プログラムを展開した。

① リサイクルボックスの体験学習

水平リサイクルの成否を分ける最大の要因は、排出段階における不純物の混入防止である。本コーナーでは、実際に流通しているリサイクルボックスを設置し、適切な分別手法についてのデモンストレーションおよび体験活動を行った。単なる「ゴミ捨て」ではなく「資

源の投入」であるという認識の転換を促し、消費者が循環プロセスの一端を担っているという当事者意識の醸成を図った。

② リサイクルバッグ製作ワークショップ

「つかう責任」を具現化する活動として、廃棄予定の資材や端切れを活用した「リサイクルバッグづくり」を実施した。参加者が自らの手で素材に新たな価値を付与する（アップサイクル）プロセスを経験することで、物の寿命を延ばすことの創造的な側面と、エシカルなライフスタイルの親しみやすさを提示した。これは、単なる知識の伝達に留まらず、身体的経験を通じた価値観の変容を企図したものである。

③ 大学発表

中央ブースに設置された特設会場にて、本ゼミの活動紹介を行った。プレゼンテーションでは、「循環社会の実現を目指して ～資源循環・資源使用抑制に向けた取り組み～」と題し、この問題の現状と、それに対する具体的な解決策、そして私たちのプロジェクトで提案するアクションプランについて、5分間で発表した。発表を通して、単なる環境保全にとどまらない、公正かつ持続可能な社会のあり方について考察を深めるきっかけの創出を目指した。以下は発表の様子である。



第3項 考察と結論

本イベントの最大の特徴は、消費者・事業者・学校・行政という異なる属性を持つ主体が同一の場集い、SDGsの達成という共通の目的を共有した点にある。オアシス21という開放的な空間で実施したことにより、これまでエシカル消費に関心の薄かった層への偶発的なアプローチが可能となり、啓発の裾野を広げる効果が得られたと考えられる。

特に、リサイクル体験を通じて得られた「正しく分ければ資源になる」という実感は、参加者の日常生活における行動変容を促す強い動機付けとなったと推察される。今後の課題

としては、こうした一過性のイベントに留まらず、地域コミュニティの中で継続的にエシカルな選択が実践されるような、中長期的なフォローアップ体制の構築が挙げられる。

第4項 学んだ点、気づき

本イベントを通して多くの人が循環型社会に関心を持っておりそうした活動に興味を持っていると感じた。消費者団体、事業者団体や他大学がブースを出展しており、それらを目的に幅広い世代の方が絶えず訪れていた。大量生産、大量消費が問題視されるなかで、それにどう取り組んでいくべきかと考えるひとが多くいるということを確認できたというのは課題解決への重要な第一歩であると感じた。その一方で本ゼミはこのイベントにおいて不要な服からリサイクルバッグを制作したり不要な布を活用した缶バッチの制作をしたりするワークショップを開催し、そのまま捨ててしまえばゴミとなるものが有効に活用すれば資源となるということワークショップを通じて消費サイクルの一端を担う消費者にエシカルな消費者意識を促すことを目的としたが、活動をしていくなかで不要なものから制作されたバッグや缶バッチといったものが確かにものの寿命を延ばしていると言えるが、手軽に作った簡易的なものであるため、それが何年も持つとは思われなし、それを制作していく過程で接着剤や布フェルトなど新たな資源を投入している。循環型社会を呼びかけ、それを周知する活動としての役割は果たしているのかもしれないと感じたが、その活動が消費者意識に働きかけるだけでなく、実際に少しでも資源の活用役に役立っているのか、新たな資源を投入してまで少しでもものの寿命を延ばすことに意味はあるのかという疑問が浮かんだ。

第5項 課題

上記したように新たな資源を投入し、一時的にもものの寿命をのばすだけで循環型社会に貢献していると考えてしまうのは今後の課題であると考え。特別な技能を持ち合わせていないひとが短時間で加工作業に取り組んでも、長く使えるような製品をつくることは難しく仮初のその場しのぎに過ぎない。一般の学生が衣類のリメイクなどをする場合、中長期的に見て資源を有効に使っているとはいえ、消費者意識の改善を呼びかけることには多少役に立っているのかもしれないが、それすらもどれくらいの意味があり消費者に影響を与えることができたのかは不明である。だとすれば一般の学生が行うべきなのは衣類のリメイク作業そのものではなくリメイクを行っている専門業者を見つけイベント時などに衣類を回収し、回収された衣類のリメイクは専門業者に任せるといったものだと思う。地球資源のことを考えれば、これが最も効率的で無駄のない方法である。資源の加工に直接関わる部分に関しては専門業者に任せ、一般の学生が力を入れるべきなのはエシカル消費をどのように呼びかけるかという部分だと思う。今回のイベントではブース内にパネルを展示したり、

訪れていただいた方との会話のなかで伝えたりすることに留まった。振り返ったときにそれらに加えて、他の手段もあってよかったのではないかと思う。例えば、ブースにリメイク素材を自由に持ち帰れるコーナーを設置する取り組みは端切れやボタン、糸など、本来であれば廃棄されるはずの素材を資源として提供することで、来場者は無意識のうちに「捨てられるものにも価値がある」という感覚を得る。この体験は、説明的なパネルや講義よりも直接的で、素材を手にとるといった身体的行為を通じて価値観の変化を促す点に特徴がある。またこの手法ならば自身で有効に活用できるというひとの手に渡るため資源の無駄を極力排除することにつながると考えられる。私たちが循環型社会達成のためにできることは限られているが、本来の趣旨を見失わずその中でなにができるのかを議論し、行動に移していくことが重要だと感じた。

第5章 総括

本報告書の第1章および第2章では、プラスチックおよび衣類廃棄をめぐる環境問題を、環境負荷や国際正義の観点から整理したうえで、その解決に向けた一つの具体的手段としてペットボトルの水平リサイクルを取り上げてきた。

第1章では、プラスチックが生産段階では比較的環境負荷の小さい素材である一方、廃棄段階においては海洋プラスチック問題やマイクロプラスチック問題を引き起こし、生態系のみならず人間の健康にも深刻な影響を及ぼしている現状を確認した。特に、先進国から途上国への廃プラスチック輸出によって環境負荷が転嫁されてきた構造は、単なる環境問題にとどまらず、国際正義の観点からも看過できない問題であることを示した。同様に衣類廃棄においても、国内では大量生産・大量消費・大量廃棄が常態化し、国外では先進国から輸出された古着が途上国の環境破壊を引き起こしている実態を明らかにした。さらに、本学学生を対象としたアンケート分析からは、衣類廃棄において「手軽さ」が行動選択に大きな影響を与えていることが確認された。一方で、学内に回収インフラが整備されれば、多くの学生がリサイクル行動に前向きになる可能性も示唆された。この結果は、環境問題の解決において制度や技術だけでなく、身近な生活環境における実践の重要性を示している。

第2章では、プラスチック問題への具体的な対応策として、ペットボトルの水平リサイクルに焦点を当てた。日本におけるペットボトルのリサイクル率は高水準にあるものの、その多くはカスケードリサイクルであり、最終的には廃棄に至るという限界を抱えていることを指摘した。これに対し、使用済みペットボトルを再びペットボトルとして再生する「ボトル to ボトル」に代表される水平リサイクルは、何度でも資源循環が可能であり、CO₂削減効果の面からも循環型社会の実現に不可欠な手法であることを確認した。しかし、水平リサイクルの実現には高度な品質管理が求められ、異物混入を防ぐためには消費者一人ひとりの分別行動が不可欠である。すなわち、技術的に優れたリサイクル手法が存

在していても、それを支える市民の行動と意識が伴わなければ、真の資源循環は達成されない。

第3章・第4章では、衣類を中心とした資源循環の現状と課題を整理したうえで、本ゼミが実践してきたリユース・リサイクル・アップサイクルに関する活動内容と、その成果および今後の課題について検討した。

近年、衣類のリユース率は一定の向上を見せているものの、学生服のように刺繍や校章、個人名などが入った衣類は既存の回収システムでは対象外となることが多く、結果として廃棄されてしまう現状がある。この課題に対し、本ゼミでは学生服リユースに着目し、学生服リユースショップさくらやと連携した回収・再流通の取り組みを実施した。これは、不要になった学生服を次の使用者へとつなぐだけでなく、経済的に学生服の購入が負担となる家庭への支援にもつながる実践であり、環境面と社会面の双方に意義を持つ活動であったといえる。また、衣類のリサイクルについては、素材の混紡化などにより高い技術的・コスト的障壁が存在することを確認した。その代替的・補完的手法としてアップサイクルに着目し、名古屋市や中部リサイクル運動市民の会といった地域主体の取り組みを事例として取り上げた。特に市大祭やメーテレマルシェ、オアシス21でのイベントでは、学制服・古着回収、アップサイクルワークショップ、分別体験などを通じて、循環型社会の仕組みを体験的に伝える啓発活動を行った。これらの活動には多くの来場者が参加し、資源循環への関心を高める一定の成果を上げることができた。

一方で、活動を振り返る中で、アップサイクルやリメイクそのものが本当に資源の有効活用につながっているのかという課題も浮き彫りとなった。簡易的なリメイク品は必ずしも長期間使用されるとは限らず、制作過程で新たな資源を投入している点を考慮すると、循環型社会への実質的貢献としては限界がある可能性がある。この点から、今後は学生が直接加工を担うのではなく、専門的な技術を持つ事業者と連携し、回収と啓発に注力するという役割分担の重要性が示唆された。

総じて、本ゼミの活動は、衣類やペットボトルを「ごみ」ではなく「資源」として捉え直す視点を参加者に提供し、エシカル消費への意識を喚起するという点で大きな意義を持っていたといえる。今後は、一過性のイベントにとどまらず、より効果的かつ持続的な啓発手法を模索しながら、循環型社会の実現に向けた実践と検討を継続していくことが求められる。

参考文献

(第1章)

- ・伊藤ゼミ 2024 年度活動報告書
- ・株式会社エルコム「【2025 最新】マイクロプラスチックの人体への影響に驚きの研究結果。私達取るべき対策とは？」2025 年 5 月 30 日

https://blog.elcom-jp.com/2025_microplastic/#index_id1（最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日）

・環境省 「令和 2 年度 ファッションと環境に関する調査業務」

https://www.env.go.jp/policy/pdf/st_fashion_and_environment_r2gaiyo.pdf（最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日）

・環境省 「令和 4 年度循環型ファッションの推進方策に関する調査業務-マテリアルフロー」

https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/goodpractice/case26.pdf（最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日）

・くつなび 「フランスの衣類廃棄禁止令とは？廃棄を減らすためにできることも確認」

<https://okahata.co.jp/kutsunavi/abroad/about-clothingdisposal-france>（最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日）

・経済産業省 「バーゼル条約・バーゼル法」

https://www.meti.go.jp/policy/energy_environment/kankyokeiei/basel/index.html
（最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日）

・国際広報センター 「ファッション産業の廃棄物を減らすための 5 つの方法（UNEP STORY 日本語訳）」 2025 年 04 月 18 日

https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/51994/（最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日）

・消費者庁 「ファッションを持続可能に」

https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_education/meeting_materials/assets/consumer_education_cms202_231226_04.pdf（最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日）

・政府広報オンライン 「海洋プラスチック問題の解決策。マイボトルやマイバッグから始めるプラスチックとの賢い付き合い方！」 2025 年 10 月 17 日

<https://www.gov-online.go.jp/article/202510/entry-9656.html#firstSection>（最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日）

・田中秀幸 「大学生の衣類のリユース行動促進に関する研究 大学生の衣類のリユース行動促進に関する研究」

https://www2.kpu.ac.jp/life_environ/mat_cycle_soc/report/15tanaka.pdf（最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日）

・豊田市 「プラスチックごみの分別方法」最終更新日 2023 年 12 月 6 日

<https://www.city.toyota.aichi.jp/kurashi/gomi/gomi/1003801.html>（最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日）

・独立行政法人 国際協力機構（JICA） 「海洋プラスチック問題に対する JICA の取り組み」

https://www.jica.go.jp/activities/issues/env_manage/pamphlet/_icsFiles/afieldfile/2023/10/02/marine_plactic.pdf (最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日)

・ なごや環境大学 「なぜ今「プラスチック一括収集」？ 名古屋のごみ資源化、変わる現場と紆余曲折の歴史をたどる」 2025 年 1 月 22 日

<https://www.n-kd.jp/column/23726.html> (最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日)

・ 名古屋市「プラスチック資源の分け方・出し方」

<https://www.city.nagoya.jp/kurashi/gomi/1012183/1035058/1012206.html> (最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日)

・ 日精樹脂工業株式会社「プラスチックの話」

<https://www.nisseijushi.co.jp/company/plastic-story/> (最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日)

・ 日本プラスチック工業協会 「プラスチックを学ぼう！ プラスチックってなに？」

<https://www.jpif.gr.jp/learn/about/> (最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日)

・ 日本貿易振興機構 「東南アジア諸国が廃プラスチック輸入規制を強化、日本の輸出量は減少」 2019 年 6 月 18 日

<https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2019/32168afb4b8f0bfe.html> (最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日)

・ やさしい素材 JAPAN 「日本で出たプラスチックごみ 実は海外に送られていた!？」 2022 年 12 月 1 日

https://ecosozai.jp/column/6/?srsltid=AfmBOopEIRcTehb8g7PfqfXn6G1q_edrXgYfFDKEHvwYUhnv70hjdcd1 (最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日)

・ Carbonfact 「Full overview of the EU textile strategy and regulations」

<https://www.carbonfact.com/blog/policy/eu-regulations-for-textile-brands> (最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日)

・ cirquel 「The hidden cost of fashion: Kantamanto and the global secondhand clothing crisis.」

<https://www.cirquel.co/post/the-hidden-cost-of-fashion-kantamanto-and-the-global-secondhand-clothing-crisis> (最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日)

・ ELEMINEST 「マイクロプラスチックによる人体への影響 心臓・肺・血液から検出される」 2024 年 4 月 10 日

<https://eleminest.com/article/3334> (最終閲覧日 2025 年 12 月 17 日)

・ FRANCE 24 English 「Fast fashion: From your wardrobe to Chile's Atacama desert」

<https://youtu.be/e7ddmIniOeE?si=zCeINExStX789-EJ> (最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日)

・ Net Zero Compare 「EU Textile Strategy for Sustainable and Circular Textiles (EU Textiles Strategy): EU Textile Strategy: Building a sustainable and circular textile sector by 2030」

<https://netzerocompare.com/policies/eu-textile-strategy-for-sustainable-and-circular-textiles-eu-textiles-strategy> (最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日)

- ・ 田中秀幸「大学生の衣服のリユース行動促進に関する研究」

https://www2.kpu.ac.jp/life_environ/mat_cycle_soc/report/15tanaka.pdf (最終閲覧日 2025 年 1 月 7 日)

(第 2 章)

- ・ 普通のリサイクルとは何が違う？ ペットボトル資源を最大限に活用する水平リサイクル「ボトル to ボトル」とは | コーポレートブログ | コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社

https://www.ccbji.co.jp/blog/bottle_to_bottle/ (最終閲覧日 2026 年 1 月 6 日)

- ・ リサイクル率の算出 | 統計データ | PET ボトルリサイクル推進協議会

<https://www.petbottle-rec.gr.jp/data/calculate.html> (最終閲覧日 2026 年 1 月 6 日)

- ・ CCBJH グループのコミットメント | サステナビリティ | コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社

<https://www.ccbji.co.jp/csv/csvgoal/> (最終閲覧日 2026 年 1 月 6 日)

- ・ Recycle: 「ボトル to ボトル」 水平リサイクルの推進 サントリーグループのサステナビリティ サントリー

https://www.suntory.co.jp/sustainability/env_circular/recycle/ (最終閲覧日 2026 年 1 月 6 日)

(第 3 章)

- ・ 衣類循環に向けた取り組み「RENU (レニュー)」プロジェクト (伊藤忠商事)

https://www.city.nagoya.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/012/390/renu.pdf
(最終閲覧日 2026 年 1 月 8 日)

- ・ 環境省 「サステナブルファッションとは」

https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/index.html (最終閲覧日 2026 年 1 月 8 日)

- ・ 環境省 (2025 : 10) 「衣類の資源循環システム構築に向けた現状」

<https://www.env.go.jp/content/000349540.pdf> (最終閲覧日 2026 年 1 月 8 日)

- ・ 環境省 (2025 : 11) 「衣類の資源循環システム構築に向けた現状」

015_05_00.pdf (最終閲覧日 2026 年 1 月 8 日)

- ・ 環境省 「令和 5 年度使用済製品等のリユースに関する自治体モデル実証事業及び使用済衣類回収のシステム構築に関するモデル実証事業の公募採択事業について」

https://www.env.go.jp/press/press_02038.html (最終閲覧日 2026 年 1 月 8 日)

- ・ 学生服リユース shop さくらや「学生服リユースショップさくらや」

<https://www.seifuku-sakuraya.com>（最終閲覧日 2026年1月8日）
・学生服リユース shop さくらや「さくらや名古屋店 BLOG」

<https://www.seifuku-sakuraya.com/blog/nagoya/>（最終閲覧日 2026年1月8日）
・講談社 SDGs 「【2025年版】 アップサイクルとは？ リサイクルやリメイクとは違う、SDGs への新たなアプローチ | SDGs にまつわる重要キーワード解説」

<https://cstation.kodansha.co.jp/sdgs/article/451>（最終閲覧日 2026年1月8日）
・名古屋市 「衣類循環に取り組みましょう！（認定 NPO 法人中部リサイクル運動市民の会）」

<https://www.city.nagoya.jp/kurashi/gomi/1012351/1012374/1040286.html>（最終閲覧日 2026年1月8日）
・名古屋市 「令和5年度のアップサイクルの取り組み」

<https://www.city.nagoya.jp/kurashi/gomi/1012351/1012386/1036087.html>（最終閲覧日 2026年1月8日）
・名古屋市「令和5年度ひとり親世帯等実態調査結果の概要」
00kekkanogaiyou.pdf（最終閲覧日 2026年1月8日）
・日本経済新聞「学生服、10年で単価3割上昇」

<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO87096110U5A300C2EAC000/?msockid=329d2832bf2160a37253ad4be966efa>（最終閲覧日 2026年1月8日）
・認定 NPO 法人 中部リサイクル運動市民の会

<https://es-net.jp/>（最終閲覧日 2026年1月8日）
・PASSTO「売る？捨てる？パストする！」

<https://www.passto.jp>（最終閲覧日 2026年1月8日）
・REVER「衣類の大量廃棄はなぜ起こる？現状と背景について解説」

<https://www.re-ver.co.jp/ecoo-online/recycling-forefront/20231116.html>（最終閲覧日 2026年1月8日）
・SDGsBOOK「学生服リユースショップ「さくらや」の取り組み」

<https://www.sdgsbook.jp/interview/interview-08/>（最終閲覧日 2026年1月8日）